

岡崎むかし館

かん ばん 看 板

商品・家名・職業などをわかりやすく伝え、通行人の目を引き、購買意欲を高める働きをしている看板。その歴史は古く、平安時代の記述に既にみることができますが、盛んに作られるようになったのは、桃山・江戸時代に

入ってからのようです。江戸時代初期までは、小ぶりで軒先に下げるタイプが多く、元禄年間(1688～1704)以後、商工業の発展につれて次第に大型化し、遠くからも目立つよう工夫されていきます。特に江戸中期から明治初期にかけては、おしゃれで意匠を凝らした、庶民芸術といえるような看板が豊富に見られます。

明治以降、ペンキが輸入されると、各種の色彩を用いた文字看板が増えていきました。そして明治後半からは、木に代わってブリキなど金属製の看板が作られるようになり、特にガラス質の塗料などで仕上げたホーロー（珐瑯）看板は、昭和30年代に全盛期を迎えました。今でも道路沿いの古い家屋の壁面に、そうした看板が見られることがありますが、ずいぶん少なくなってきました。

看板には、設置する場所によってさまざまな形式があります。「屋根看板」、店の前に置く「置き看板」「立て看板」、庇ひさしに吊るす「下げ看板」、夜間営業用の「行灯看板あんどん」などです。「看板娘」「看板になる」といった言葉がありますが、これらは、看板がそれだけ有用なものだったことからきているのでしょう。また、看板の表示様式を大別すると、以下のようになります。

様式	実例
実物を看板にしたもの	苧麻 <small>ちよま</small> (麻織物の原料となる植物繊維) 髻 <small>かもし</small> (女性が地髪に添え加える入れ髪) 笠
実物を模造したもの	糸、筆、扇 <small>おうぎ</small> 、眼鏡、矢立 <small>やたて</small> (筆記用具) など
商品の容器・付属品を絵にしたもの	酢、薬、茶、砂糖 など
商品と関係のあるもの	酒屋 杉玉(新酒売り出しの目印として、杉の葉を束ねて作った酒林 <small>さかばやし</small> から) 味噌屋 切匙 <small>せっかい</small> (樽の内側についた味噌をすり落とす道具から)
判じ物	櫛屋 十三や(「くし」が「九四」で、「苦死」に通じるのを嫌って) 焼芋屋 八里半(焼芋の味が栗=「九里」に近いと謎かけて) 商い中 春夏冬(「秋」がないから)
文字看板	すし、氷 など

ひとつの看板から、当時の社会の様子をうかがい知ることが可能です。挑戦してみてください。

参考文献：「日本民具事典」 日本民具学会 ぎょうせい

「商家の道具 松久民具館図録」 三渡俊一郎 光出版

「ものと人間の文化史 136-看板」 岩井宏實 法政大学出版局

木看板「貸剃刀申込所」
岡崎市立中央図書館 蔵

